

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2463 号

Efficacy of cytapheresis for remission induction and dermatological manifestations of ulcerative colitis

潰瘍性大腸炎に対する寛解導入療法および皮膚疾患合併症に対する血球成分除去療法の有効性

野村 収 (のむら おさむ)

博士 (医学)

#### 論文内容の要旨

血球成分除去療法は、潰瘍性大腸炎患者に対し、病態を悪化させる炎症性サイトカインを放出する活性化された白血球を、吸着・除去することで効果を発揮するとされている。また、潰瘍性大腸炎患者のなかには、腸管外合併症として結節性紅斑や壊疽性膿皮症などの皮膚疾患を発症する患者がいる。当院で 2008 年から 2015 年の間に 181 症例の活動性潰瘍性大腸炎患者に対し、血球成分除去療法である顆粒球吸着除去療法または白血球除去療法を行い、各症例は週 1 回または週 2 回以上の集中療法を最大 10 回まで行った。そのうち 13 症例は結節性紅斑または壊疽性膿皮症を合併していた。潰瘍性大腸炎の疾患活動性は Lichtiger's clinical activity index (CAI) を用いて評価し、CAI 4 以下を寛解、CAI 3 ポイント以上減少したものを有効と定義した。さらにステロイド減量効果と腸管外合併症に対する効果も検討した。全体での寛解率と有効率は、それぞれ 52.5%と 71.8%であり、CAI は  $9.4 \pm 3.3$  から  $4.9 \pm 3.5$  ( $P < 0.001$ ) に低下した。プレドニゾン、抗 TNF- $\alpha$  製剤、タクロリムスといった潰瘍性大腸炎の主な寛解導入薬併用群と非併用群では有効性に有意差は認めなかった。プレドニゾン併用の 84 症例では、1 日の平均プレドニゾン投与量が 18.15 mg から 12.43mg/日 ( $P < 0.001$ ) に減少し、21.7%がステロイド離脱に成功した。結節性紅斑または壊疽性膿皮症合併例は全例で有効であり、特に結節性紅斑合併の 2 症例では、併用薬を使用せず血球成分除去療法単独で寛解を達成した。血球成分除去療法はステロイド減量効果があり、安全で有効な寛解導入療法であることが示された。また、結節性紅斑、壊疽性膿皮症といった腸管外合併症に対しても有効であった。